

# フランクフルトにおける「苦悩」の概念

—その人間形成論的意義と形而上学的有意性—

今井伸和

V. E. Frankl's Begriff des „Leidens“:

Seine Bedeutung in der Bildungstheorie und seine metaphysische Relevanz

Nobukazu IMAI

## はじめに

程度の差はあれ、いかなる人間もその人間の仕方  
で苦悩を体験している。苦悩しない人間というものは  
おそらく存在しないであろう。では、われわれ人間  
にとって苦悩とはどのような意味を有するのであ  
ろうか。われわれにとって苦悩は無意味であり、忌  
避されるべきものなのであるだろうか。それとも、ロ  
マン・ロランが言ったように、「人生というものは、  
苦悩の中においてこそ最も偉大で実り多くかつまた  
最も幸福である」<sup>1</sup>ということなのであるだろうか。もし  
そうであるならば、いかにして苦悩は実り多く意味  
があり、われわれに幸福をもたらしてくれるものな  
のであるだろうか。

このような問題を考える上で、本稿では、フラン  
クル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) の苦悩 (das  
Leiden) の概念を取りあげる。彼の思想において「苦  
悩」は重要な位置を占めている。彼によれば、人間  
とはホモ・パティエンスである。すなわち、苦悩と  
は忌避されるものではなく、むしろそれなしでは人  
間たり得ないような、人間の本質を構成するもので  
ある、ということである。では、人間の本質として  
の苦悩とは一体どのようなものであろう。本稿では  
この問題を明らかにしたい。

言うまでもなく、フランクフルト研究において苦悩は  
しばしば取りあげられるが<sup>2</sup>、とりわけ本稿で考究し  
たいのは、フランクフルトにおける苦悩と人間形成との  
連関である。そのためには、フランクフルトが苦悩をど  
のように捉えているか、フランクフルトにとって苦悩に  
はどのような意味があるのかを整理する作業が必要

である(第1章)。それをふまえて、苦悩において自  
己がどのように成長するのかということをも明らかに  
したい(第2章)。そして最後に、苦悩を経て成長し  
た人間と世界との関係はどのようになっているのか  
について考究する(第3章)。

## 1 「苦悩」とは何か

### A 不可避の運命としての苦悩

ここでは作業仮説としてあらかじめフランクフルト  
における苦悩を簡単に定義しておきたい。ドイツ語で  
「Leiden」は、病気に罹ること、損害を被ること、不  
都合なことにうろたえることであるが、それとともに、  
重篤な病、苦痛、悩みといった状況に耐えなければ  
ならないことをも意味する<sup>3</sup>。後に見るように、  
フランクフルトにおいても、苦悩とは、身体的な苦痛  
であれ心的な苦悩であれ、その苦しみに耐えることを  
意味している。

しかしながら、避けることが可能な苦悩は避け  
ればよいことは言うまでもない。苦悩には避けること  
ができる苦悩と避けられない苦悩とがあるであろう。  
フランクフルトが苦悩という言葉で考えているのは避け  
られない苦悩のことである。避けられる苦悩は避け  
ればよいのである。例えば、手術できる病気である  
にもかかわらず手術を受けない人は、現実逃避をし  
ているか、殉教者や英雄の役を演じようとして不  
必要な苦悩を目指しているマゾヒズムのどちらか  
であるとフランクフルトは断じている<sup>4</sup>。

マゾヒズムの問題はそれが自己目的的であるこ  
ろにある。換言すれば、自分自身の快のために不  
必

要に苦悩しているということである。したがって、自己の満足に終わってしまい、世界に対して何らの影響ももたらさない苦悩なのである。それに対してフランクルの念頭にある苦悩とは、運命的な不可避の必然的な苦悩なのである。例えば、治療不可能な病気や愛する者との死別などがそれに当たるであろう。

以上見たように、フランクルにおいて苦悩というのは、不可避の運命に苦悩することを意味する。さらにこの苦悩を耐えることに価値があるとされる。では、なぜそのような苦悩に耐えることに価値があると言えるのだろうか。

## B 態度価値としての苦悩

この問題を論ずる上で、まずフランクルの価値論について簡単に見ておく必要がある。フランクルは、価値を三つの範疇に分類している。

価値を実現する第一の可能性は、私たちが何かを創造すること、つまり、私たちが何らかの仕方で世界を形成することにあります。第二の可能性は、私たちが何かを体験すること、つまり、私たちの内面が存在の美や真理によって貫かれることにあります。最後の、価値実現の第三の可能性は、苦悩すること、つまり、存在に耐えること、運命に耐えることにあります<sup>5</sup>。

すなわち、フランクルのいわゆる「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」である<sup>6</sup>。まず「創造価値」とは、たとえば芸術家が作品を創造するように、仕事や活動をとおして何かをこの世界に実現する行為における価値であり、次に「体験価値」とは、われわれが自然の美や芸術的な美に触れて、感動するという体験において実現される価値である（なお、フランクルによれば、愛される体験もこの「体験価値」に含まれる）。最後に、「態度価値」であるが、これは、不可避の運命に対して、そこから逃避するのではなく、それに苦悩し、耐えることによって、実現される価値である。たとえば、治療不可能な病に耐えることがこれに当たるであろう。

フランクルによれば、このそれぞれの価値範疇にはヒエラルキーが存在し、態度価値がその最上位を

占めている。では、なぜ態度価値が最上位なのだろうか。それは、創造価値や体験価値が実現できないような状況においても、態度価値の実現の可能性は残されており、その可能性は決してなくなるからである。フランクルは強制収容所の体験を次のように述べている。

バラックの中で隣に寝ている人たち、しかも自分たちが死ななければならないこと、いつ死ぬかということ、死が近いことをかなり正確に知っていた人たちに対してどういえばよかったのでしょうか。その人たちは、私と同じように、生活も、人間も、仕事も自分を待っていないことを、〔…引用者による中略…〕また、待っていたとしてもむだだろうということを知っていたのです。<sup>7</sup>

このような人々にとって、創造価値や体験価値が実現される可能性は残されていなかった。唯一残されていたのが、この運命的な苦悩に耐えることだけであった。

しかも、フランクルによれば、これらの人々は誰もが運命に耐えるということをも自分の使命であると感じたという。すなわち、「ひとりひとりが、とにかくどこかにだれかがいて、見えない仕方で自分を見ていて、ドストエフスキーがかつていった意味で『自分の苦悩に値する』ことを求め、『死を自分のものにする』ことを期待している」と感じたということである<sup>8</sup>。

われわれは、ある時には創造によって、あるときには体験によって、この世界に価値を実現していく。しかしながら、創造も体験もなしえないような状況にあっても、苦悩に耐えることによって態度価値を実現する機会がわれわれには残されているのである。加えて、その態度価値を実現することがその人にとっては使命として感じられる。自分の身近な人のために、良心のために、あるいは信仰のために、自分はこの試練に耐える使命があると感じるのである。まさにそのために、態度価値は最高の価値とされる。

ゲーテは、「いかなる状態であれ、行為あるいは忍耐によって、高貴にしえないような状態はない」と述べた<sup>9</sup>。状況を変えるようないかなる行為も既に

不可能であり、そこにおいては苦境を耐え忍ぶしかないような困難な状況にあつては、耐え忍ぶことでその苦境が高められる、というのである。(また、そのみならずフランクルの場合、忍耐によって自分自身も高貴にされるということが言えるであろう。これについては次章において言及する。)

### C 苦悩の意味

では、苦悩にはどのような具体的な意味があるのだろうか。フランクルが強調するのは、それが業績であるという点と犠牲であるという点の二つであろう。それぞれについて考えたい。

フランクルは、「苦悩」とは「何よりもまず業績(Leistung)である」と述べている<sup>10</sup>。それに関して、フランクルは次のような事例を挙げている。それは、ある看護師が担当した患者の事例である。

「私は二二歳の女性患者を担当しています。彼女は、一八歳のときに食料雑貨店に向かって歩いているとき銃で撃たれて重傷を負ったのです。彼女は口にくわえた棒を使って、かろうじて仕事をやり遂げることができます。彼女は、自分の人生の目的がまったくはっきりしていると感じています。彼女は新聞やテレビによって苦境にある人々の話を探して、彼らに慰めと励ましの言葉を贈るために手紙を(口にくわえた棒でタイプを打って)書いています。」<sup>11</sup>

この女性患者の場合、まず、その苦悩は不可避であるということ、第二にもし銃で撃たれなかったら実現されていたであろう自分の可能性を断念し、この苦悩を引き受け、そのような状況において何が実現可能かを案出し、それを実現したということである。また別の、脳性麻痺というハンディキャップを背負いながらある身体障害者団体の役員として活動している人について、フランクルは次のように述べている。「彼の人生全体は、ただ一つの大きな断念から成り立っていたのではないのでしょうか。いま彼は、その『断念』を『成し遂げた』のです。」<sup>12</sup>

これら二つの事例から考えると、もちろん、苦悩によって世界が良い方向に変わるということが業績であるとも言えるのだが、むしろ重要なのは、苦悩

に耐えることそれ自体が業績である、ということであろう。フランクルはそのことを、断念を「成し遂げる」という言い方で言おうとしているのである。断念を、つまり不可避の運命の受容を「成し遂げる」(leisten) ことが、そのまま「業績」(Leistung) なのである。

ここで、われわれは日本語における〈諦める〉という言葉と連想する。〈諦める〉には、物事の本質を悟るという意味と文字通り〈あきらめる〉という意味がある(『日本国語大辞典』)。そもそも〈諦める〉の語源は〈明らかにされる〉であるから、もともとの意味は物事の本質を悟るという前者の意味であったのだが、〈あきらめる〉という後者の意味が派生したものと考えられる。『大言海』によれば、〈諦む〉は〈明らむ〉の転とされ、それは「詳カニ見究ム」とされる。すなわち、物事の道理が明らかとなり、思いを絶つということである。漢字の〈諦〉にも同様に〈つまびらか〉という意味があり、また佛教においては〈まこと〉や〈さとり〉を意味するとされる(諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館)参照)。要するに、〈諦める〉ということには消極的な意味ではなく、物事の本質を明らかにし、ひいてはそこで自分は何を成し遂げられるのかということも明確になるという積極的な意味があるのである。

とはいえ、上記の二つの事例は苦悩に耐えることのみならず世界に何かをはたらきかけているという意味で広義の創造価値と言えなくもない。したがって、次に、苦悩に耐えることそのこと自体が純粋に意味を有する事例について見ていきたい。それは、フランクルが「意味に満ちた苦悩とは、勝れて犠牲なのです」と述べているような苦悩である<sup>13</sup>。

ある開業医が妻に先立たれ、ひどい抑鬱のためにフランクルの診察を受けた。フランクルは次のように彼に言った。「もしもですよ、ドクター、あなたが先に死んで、あなたの奥さんがあとに残ったとしたら、どういうことになっていたでしょうか？」以下は、開業医とフランクルのやりとりである。

「おお」と彼は言いました、「それは彼女にとっては恐ろしいことです。どんなに苦しむことでしょうか!」。そこで私は言いました、「そうでしょう、ドクター、そういう苦しみを奥様

に味わせないで済んでいるのですよ。この苦しみから奥様を救ったのは、あなたなのです。そしてその代わりに、あなたは今一人で生き、彼女のいないことを悲しまなければならぬのです」。<sup>14</sup>

このやりとりのポイントは、自分の苦悩が、相手が苦しめないという事実と同時に成り立っているということである。いずれ人間は死ぬ。夫婦の場合は、どちらか一方が先に死に、もう一方が残される。互いに愛し合って慈しみあっていたらいるほど、苦悩は大きくて深い。逆に愛していなければ苦悩せずに済む。苦悩の深さは二人の愛の深さの証左でもあるのである。

しかしまた、その苦悩は相手を苦しませなくて済んでいるという事実と一つになっているのであろう。この開業医の苦悩は、愛する妻を苦しませなくて済んでいる、そのための苦悩、すなわち妻のために自己を捧げるという犠牲の意味をもった苦悩だったのである。苦悩が雲散霧消するというのではない。しかしそれでも苦悩に犠牲という意味を見出したその瞬間に、苦悩に耐えることができるのである。彼は自分の苦悩をそのように受け取り直すことにより、苦悩のただ中で、苦悩を克服したということである。

## 2 苦悩と人間形成

### A 苦悩を通して人間は成長する

ゲーテが言うように、苦悩に耐えることによって目下の苦境をわれわれは高貴にすることができるのだが、それだけでなく、困難な状況に耐えることによってわれわれ自身が高貴にされるということがあろう。そこには苦悩による人間の成長がみとめられる。本章の課題は苦悩と人間形成の連関を明らかにすることである。

フランクルによれば、苦悩は業績であるのみならず、成長でもあるとされる。「苦悩をみずからに引き受けること、苦悩をみずから受け入れることによって、私は成長します。」<sup>15</sup>その場合、成長とはどのようなことなのか。それはフランクルにおいては、「事実をより高い次元に移し換えることによって、私は私自身を、私自身の実存をより高次の段階に置

くことにほかならない<sup>16</sup>。ここで「事実」というのは、例えば、もし私がおそらくの重篤な病気に罹っている場合、私にとってその病気は「所定の事実である」のだが、しかしそれのみならず、その病気を毅然として受け入れる場合には、「この病気は私に課せられている。私はこの病気から何を生み出すのか、この病気から何を始めるのか、という問いの前に立たされている」のである<sup>17</sup>。

より具体的に考えてみよう。フランクルはヴェルフェルの小説『小市民の死』を取りあげ、次のように述べている。

この男は、貧困と憂慮のうちに一生をおくり、貧困と憂慮に埋没しているように思われます。さて、この男は、病気になって入院します。ヴェルフェルは、この男が、近づいてくる死に対して英雄のように戦うようすを描きます。彼が元日になって死んだ場合は、家族に保険金が支払われますが、そうでなければ、保険の支払いの対象にならないのです。彼は、死と戦います。元日まで生き延びようと苦闘します。家族の財政的な保障を得ようと苦闘します。そのなかで、この素朴で単純な人間は、詩人にしか描けないような立派な人間に成長していくのです。<sup>18</sup>

「小市民の死」は、フランツ・ヴェルフェル (Franz Werfel, 1890-1945) の代表的な短編小説である。この小説から、苦悩における成長とは何かということを読み取りたい。なお、引用にあたっては『表現主義の小説』(河出書房新社、1971年)所収の谷友幸訳「小市民の死」に依った。

小説の主人公フィアラは、平凡で小市民的な人間として描かれている。そのフィアラがあるとき病気になる。彼の病名ははっきりとはしないが、入院した11月下旬の時点で「一週間、せいぜい十日くらいしか、もたないでしょう」と医者から言われている。フィアラはそれから、自分の誕生日(正確に言うと、「元日」ではなく1月5日のフィアラの誕生日)まで病苦に耐えるわけである。入院から死までの間に、彼はどのように成長したのであろう。

まず注目すべきは、フィアラの志向する対象が変化したことである。病気になる以前、フィアラはこ

とあるごとに過去のよりよき時代の取るに足らない栄光を追憶し、自己満足を覚えていたが、しかし、病を患ってからは、年老いた妻と病弱の息子のことしか考えなくなったのである。その妻と息子のために彼は1月5日の誕生日まで生き延びねばならなかった。どうしても苦痛と苦悩に耐えねばならなかったのである。彼が苦悩に耐えることは、過去の栄光にすがって生きてきた人生の断念であり、妻と息子のために生きるという犠牲であった。

もう一つ重要なことは、フィアラが苦悩に耐えることを使命として受け取ったことである。最終的に彼は次のような考えに至る。

誰が命じたかは、もう覚えていない。だが、命令は命令である。それにまた、終えていない仕事は成し遂げねばならぬ。命令下にあるというのは、素晴らしいことだ。任務を持つというのは、素晴らしいことだ。（「小市民の死」、155頁）

このように考えることも、彼にとってはとても大きな変化であると言える。それまでの彼は、自分の人生を他人と比べてまんざら不満とも思えないが、その人生を心の底から肯定することもできない小市民であった。それに対して、病気になってからの彼は、不可避の運命を自分の使命として受け取り直し、苦悩に立派に耐え抜いたのである。臨終に際して彼は自分の人生を絶対的に肯定する。また興味深いことに、次第にフィアラの風貌も変化していった。フィアラの容姿は、医者をして次のように言わせている。「あの男にはある風貌が具わっている。ミケランジェロだと、僕はひとり心のうちで思った。そしてどんなにしがたい市民でも、このような状態を迎えれば、造形的になるものだ。」（147頁）なお、ミケランジェロも、きわめて意志が弱い人間であったとされるが、数々の苦悩に苛まれながら偉大な芸術作品を創造した人でもあったのは周知の通りである<sup>19</sup>。

## B 自己の本質

以上見たように、フィアラは、自己満足的な生を断念し、自己の生と死を犠牲に捧げることによって、

成長を遂げた。犠牲とは自分以外の者や事柄のために自己の生（あるいは死）を捧げることであるが、そのためにはフィアラのように自己のつまらない欲望を断念するということが必要ならなければならないであろう。したがって、犠牲とは言い換えると自己を捨て去り、無になることと言えるかもしれない。しかし、そうした無とは虚無とか空虚という意味ではない。自己を捨て去った無において、自己の本質と世界の本質が見えてくるような無であろう。文字どおり自己を〈諦め〉て無になるということと、自己の本質がつまびらかになるということが同時に成り立つのである（同時に世界の本質もつまびらかになるのであるが、それについては次章で考察する）。

このことを明らかにするため、フランクルの強制収容所の体験を取りあげたい。フランクルは収容所において囚人が苦悩によって焼き尽くされて「無」になると述べている。「収容所の中では自分が無になってしまっていたのです。〔…引用者による中略…〕私たちは何ものでもなかったのです。私たちはたんに無を見たのではなく、無だったのです。」<sup>20</sup>やはり、この場合の無も虚無ということではなく、無になることによってその人間にとって本質的でないものが問題にならなくなり、本質的なものだけが残るということである。

強制収容所では、あらゆる非本質的なものが人間から溶け去りました。人間が持つすべてのもの—金、権力、名声、幸福—が抜け落ちたところ、人間が「持つ」ことができず「ある」ことしかできないものだけが残ったところ、そこで残ったものは、人間自身だったのです。<sup>21</sup>

そのような状況において財力や権力、知性や体力などが相対的なものとなり、本当に重要なものが明らかとなる。それは人によってそれぞれ違うわけであるが、フィアラの場合は、妻と息子のために苦悩に毅然と向き合い立派に苦悩に耐えるということであった。われわれは善ない生活において本質的なもの、絶対的に大切なものに気づかないということがしばしばである。しかし、苦悩がきっかけとなり、非本質的なもの、相対的なものを断念し自分を捨て去る、すなわち無となることによって、自己の本質

を悟ると考えられる。そこにおいて自分が本当に探し求めるもの、自己の本懐がわかるのである。

文字どおり無になった人は、文字どおり生まれ変わったように感じるのです。しかし、以前の自分に生まれ変わるのではなく、もっと本質的な自分に生まれ変わるのです。<sup>22</sup>

要するに、苦悩における成長とは、苦悩がきっかけとなり自己が無となることを通して自己の本質が顕わとなる過程であると言える。

### 3 苦悩の形而上学的有意性

#### A 世界のリアリティにふれる

上述のように、われわれが成長すると、自己の本質が顕わとなるだけでなく、世界の本質も顕わとなる。フランクによれば、われわれは苦悩を通して世界の真の姿にふれることになる。

苦悩は、人間に、ものごとを見抜く力を与え、世界を見通せるようにします。存在は透き通ってきて、形而上学的な次元が見えてくるのです。

<sup>23</sup>

これは、具体的にはどのような事態なのであろう。フランクは、強制収容所という、この世で最も過酷とも思われるような限界状況において、「この世のものとは思えない」ような美しい自然にふれた体験を書き記している。

外に出ると、西の空に薄暗く燃える雲が見えた。鋼のような青色から血のような赤色まで、この世のものとは思えないくらい色調を変え、絶えず幻想的に形を変える雲は、地平線全体に生彩を与えていた。その地平線の下には対照的に、収容所の荒涼とした灰色の棟と、ぬかるんだ点呼場が広がり、その水たまりにも天空の夕焼けが映っていた。感動のあまり、われわれはしばらく押し黙った。その後、誰かが口を開いた。「世界って、なんて美しいんだろう」と。<sup>24</sup>

苦悩に耐えることで、世界が違う仕方で立ち現れてくる。世界のリアリティにふれるということが起こってくるのである。なぜそういうことが可能となったのであろう。世界の方が変わったのではない。世界を見るわれわれの側が変わったからである。実は、世界は以前から美しかったのである。つまり、われわれには自然の美しさがそれまでは見えていなかったのである。

このことに関連して、ドストエフスキー『死の家の記録』には次のような記述がある。少し長くなるが、世界のリアリティにふれる具体例として非常に重要であるので、引用したい。「わたしは岸べに立って、この果てしない、荒涼としたひろがりなをながめたものである。わたしにとって、そこにあるすべてのものが貴く、そしていとおしかった。果てしない紺碧の大空に輝く明るい熱い太陽も、遠い対岸キルギスから流れてくるキルギスの歌声も。長いことじっと目をこらしていると、そのうちに、遊牧民の粗末な、煤煙で黒ずんだ天幕らしいものが見えてくる。天幕から小さな一すじの煙がのぼり、キルギス女が一人忙しそうに二頭の羊の世話をしている。それらはすべて貧しく、粗野ではあるが、しかし自由である。すきとおるような紺碧の大空に何鳥か、鳥を見つけて、執拗にいつまでもその飛んでゆく姿を追う。ざっと水面をかすめて、青空へ消えたかと思うと、またちらちらする一点となってあらわれる…早春のある日、岸の岩の裂け目にふと見つけた、しおれかけた哀れな一輪の草花でさえ、何か痛ましくわたしの注意をとめるのだった。」(工藤精一郎訳『死の家の記録』、新潮文庫版)そして「そこからは神の世界が見えた」(同書)とも述べられている。

周知の通り、『死の家の記録』は、ドストエフスキー自身がシベリアに流刑された体験が下敷きになっているとされる。フランクが体験した世界の美しさと同様に、『死の家の記録』における「神の世界」も、苦悩がきっかけとなり自己が無となった人間に世界の本質がつまびらかにされた例であると言える<sup>25</sup>。

#### B 自己中心性からの脱却

では、どうしてこのように世界がつまびらかとな

るのか。フランクフルに立ち戻って、この問題について見ていこう。結論を先に言うと、われわれは苦悩に耐え無になることを通して、自己中心性から脱却するからである。

通常、われわれは夕焼けをいつも見ているはずなのに、フランクフルが見たように「この世のものとは思えない」ような美しさを夕焼けに見いだすということは稀である。また、ドストエフスキーの言うような「神の世界」を見るということはほとんどないと言ってよい。われわれが通常世界を見る見方は、自己の枠の内から主観的に外の客観的な世界を見ている見方にほかならない。内から外を見erるということは、まさしく、世界を対象・客観 (Gegenstand) として向こうに (gegen) 立てる (stehen) ということである。自己を中心に对象的に世界を見ているということである。自己中心的である限り、自分と世界は対立的であって、そこで世界のリアリティにふれるということは決しておこらない。

それに対して、フランクフルやドストエフスキーの見方はどうか。自己が世界を見たのではなく、世界に見せられた (魅せられた) のである。しかし、そのような見方が成り立つのは自己が無となった場合である。自己中心性を脱却したところにおいて、世界はあちらから迫ってきて、われわれは世界のリアリティに出会いうるのである。自己を無にして、自己を捨てきったところにおいて初めて、自己は世界のリアリティにふれるのである。このような事態をフランクフルは世界の「もとに在る」 (Bei-sein) ことと述べている。

精神的に在る者は、現実には他の存在者の「もとに在る」。<sup>26</sup>

フランクフルのこの「もとに在る」ことは、伝統的な認識論では理解できない。すなわち、主観と客観の分裂を前提に自己や世界を理解する認識論では、理解不可能である。フランクフルが見た夕焼け、あるいはドストエフスキーの言う「神の世界」はまさに「もとに在る」という仕方での世界のリアリティにふれた瞬間なのである。通常われわれは、主観・客観の構図を前提にして世界を認識しているものと考えているが、苦悩に耐え自己が無となることによって、

より根源的な認識、すなわち「もとに在る」という認識が可能となったのである。「もとに在る」という仕方での世界のリアリティにふれ得たということである。

## おわりに

第一章で見たように、フランクフルにおいて苦悩とは、不可避の苦悩を意味する。また、それに耐えることによって態度価値が実現され、その態度価値は他の価値に比べて最も価値が高いと言われる。その理由は、創造価値や体験価値が実現され得ないような状況においても、実現される価値だからである。第二章では、苦悩と人間形成の連関について論究した。われわれは苦悩に耐えることを通して成長する。その成長とは、苦悩がきっかけとなり自己が無となることを通して自己が本質的な自己へと転換する過程である、ということが確認された。第三章では、苦悩によって、自己の本質のみならず世界の本質がつまびらかにされることを見た。さらに、その理由についても考察し、世界のリアリティにふれることができるのは、苦悩がきっかけとなり自己が無となることによって自己中心性から脱却するからである、という結論を得た。

以上、フランクフルの苦悩概念について考察してきたが、その現代的意義について簡単に確認しておきたい。いつの時代でも苦悩はあった。どの時代の人間も、その時代の、その個人の苦悩に向き合わざるを得なかったのである。ただ現代においてその特徴があるとすれば、苦悩に耐えうる能力がきわめて減退している、ということではないか。なぜか。それは、われわれが苦悩に意味を見いだせないからである。逆に言うと、意味さえあれば、「いかなる状況にも耐える」 (ニーチェ) ことができるのである<sup>27</sup>。苦悩の意味を問うことは、意味喪失という現代に生きるわれわれにはやむを得ないことなのである。

さて、これまで苦悩の意味について述べてきたが、それでもやはり、この世界には、苦悩に耐えるということでは片づけられない極めて不合理で悲惨な苦難というものがある。この問題の考察については、それ自体が大きな問題であるので、別の機会に譲り

たい。また、苦悩と「もとに在る」こととの連関については、甚だ不十分な考察であった。これも今後の課題である。

## 註

- 1 ロマン・ロラン『ペートル・ヴェンの生涯』（片山敏彦訳、岩波文庫版）、17-18頁。
- 2 例えば、フランクルの高弟の一人、エリザベート・ルーカスは苦悩における意味探求に関連して次のように述べている。「この世界における不合理なものや一見無意味に見えるものに対してでさえも、いやまさにそのようなものに対してこそ、われわれは、能力の許すかぎり、最も意味ある答えを闘い取ることができるのであり、またそうすべきなのである。そうすることによって、悲劇的事態は、少なくとも、何か肯定的なもの、希望をもてるもの、癒しを与えるものを体験するきっかけとなるであろう。そのことで、悲劇的事態は、後になってから、あれには溢れるほどたくさん意味があった、と思われるようになるのである」（山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』、世界思想社、2002年、22-23頁）。
- 3 語源的に言うと、もともと「Leiden」は、「行く」、「旅をする」という意味であったが、後に同系ではないが苦悩・悲嘆を意味する「Leid」と結びつけられたようである。なお、語義や語源については、Duden: *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, 10 Bde., Dudenverlag, Mannheim; Leipzig; Wien; Zürich, 1999を参照した。
- 4 Vgl. Viktor E. Frankl, *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, 2. Aufl., Verlag Hans Huber, Bern, 1996, S. 213. 邦訳『苦悩する人間』（山田邦男・松田美佳訳、春秋社、2004年）、144頁。以下、Frankl, *Der leidende Mensch*と略。
- 5 Ebenda, S. 202-203. 邦訳『苦悩する人間』、119頁。
- 6 Vgl. Viktor E. Frankl, *Ärztliche Seelsorge: Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*, 10., erg. Aufl., Deuticke, Wien, 1982, S. 60-61. 邦訳『死と愛』（霜山徳爾訳、みすず書房、1957年）、52-54頁。
- 7 Viktor E. Frankl, *...trotzdem ja zum Leben sagen*, 2. Aufl., Franz Deuticke, Wien, 1947, S. 75. 邦訳『それでも人生にイエスと言う』（山田邦男・松田美佳訳、春秋社、1993年）、135頁。以下、Frankl, *...trotzdem*, 1947と略。
- 8 Ebenda, S. 76. 邦訳『それでも人生にイエスと言う』、137頁。
- 9 Goethe, *Maximen und Reflektion*, 658.
- 10 Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 206. 邦訳『苦悩する人間』、128頁。
- 11 Viktor E. Frankl, *Der Wille zum Sinn*, 3. Aufl., R. Piper, München, 1991, S. 259. 邦訳『意味による癒し-ロゴセラピー入門-』（山田邦男監訳、春秋社、2004年）、165頁。

- 12 Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 206. 邦訳『苦悩する人間』、127頁。
- 13 Ebenda, S. 210. 邦訳『苦悩する人間』、137頁。
- 14 Viktor E. Frankl, *Man's Search for Meaning: An Introduction to Logotherapy*, Beacon Press, Boston, 1992, p. 117 (なお2002年版ではp. 113). 邦訳『意味による癒し-ロゴセラピー入門-』、29頁。
- 15 Vgl. Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 206. 邦訳『苦悩する人間』、128頁参照。
- 16 Ebenda. 邦訳『苦悩する人間』、129頁。
- 17 Vgl. ebenda, S. 206. 邦訳『苦悩する人間』、128頁。
- 18 Frankl, *...trotzdem*, 1947, S. 48. 邦訳『それでも人生にイエスと言う』、85-86頁。
- 19 ロマン・ロラン『ミケランジェロの生涯』（高田博厚訳、岩波文庫版）ならびに木村素衛『表現愛』（こぶし書房）参照。
- 20 Frankl, *...trotzdem*, 1947, S. 87. 邦訳『それでも人生にイエスと言う』、140頁。
- 21 Vgl. Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 218. 邦訳『苦悩する人間』、158頁。
- 22 Frankl, *...trotzdem*, 1947, S. 87. 邦訳『それでも人生にイエスと言う』、156頁。
- 23 Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 208. 邦訳『苦悩する人間』、132頁。
- 24 Vgl., Viktor E. Frankl, *...trotzdem ja zum Leben sagen. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, 9. Aufl., München, Kösel-Verlag, 2005, S. 69. 邦訳『夜と霧』（みすず書房、1961年）、127頁。
- 25 これに関連して、精神医学者の神谷美恵子は、苦悩を経て死を受け容れた人間が見る世界について次のように述べている。「いったん死を覚悟すれば、ものの価値判断も変ってくる。なるべく価値あることに自分の生命を使いたいという気持ちだけは、たしかに出てくる。こう考えたときはじめて、死というものは生にとってプラスの意味を帯びてくる」（神谷美恵子『人間を見つめて』、みすず書房、1980年、91頁）。また、次のようにも言われる。「死に近づくに従って、人情でも自然でも、何と美しくなつかしくみえてくることか。それは人間としてごく自然な惜別の情でもあろう。ちょうど日が沈む前のひととき、斜めの陽をうけて、ものの影が濃くなり、色や形がくっきり浮かびあがって、この世ならぬ美しさをおびるのに似ている」（同書、91-92頁）。
- 26 Frankl, *Der leidende Mensch*, S. 88. 邦訳『制約されざる人間』（山田邦男監訳、春秋社、2000年）、60頁。
- 27 „Wer ein Warum zu leben hat, erträgt fast jedes Wie“, in: *Der Wille zur Macht*.